

学位論文題名

古代の海洋民オホーツク人の世界

－アイヌ文化をさかのぼる－

学位論文内容の要旨

本論文は、西暦 5 世紀から 13 世紀に、オホーツク海南岸すなわちサハリン南部から北海道北部・東部、千島列島にかけて展開したオホーツク文化について、その起源を探究し、考古学的な文化内容の復元を試み、極東地域の諸文化の中にオホーツク文化を位置づけて評価したものである。

序では本論文の骨子となる、オホーツク文化における「石器時代的性格」と、オホーツク文化に隣接する南北両文化における共通性とが、オホーツク文化の実態を解明するための問題設定として提示される。これを受けて、以下、三部構成の第 1 部ではオホーツク文化について、第 2 部では擦文文化とアイヌ文化について、第 3 部ではオホーツク・擦文・アイヌ各文化における鉄製品についての研究が展開される。

第 1 部第 1 章では礼文島香深井 1 遺跡の事例を検討しながら、生業の実態を明らかにする。それは海獣狩猟のみではなくて、むしろ魚類を対象とした漁業活動を主体とするものである。また、オホーツク文化の社会に関しては、拡大家族を単位とする推定人口規模 180 人ほどの地域社会が形成され、そのような地域社会が道北・道東に 10 前後、サハリン南部にも同様に 10 前後存在することから、オホーツク文化の全人口を 4,000～5,000 人程度と推計する。第 2 章ではオホーツク文化の時間的な枠組みを前期・中期・後期の 3 時期区分として提示し、それらは単に土器の変化に基づく便宜的なものではなく、分布域の拡大や地域差の発生、地方集団への分裂に対応するものであることを論じる。第 3 章ではオホーツク文化と時間的空間的に関連をもつところの、考古文化として把握される諸集団や文献史料に登場する諸集団とオホーツク文化との関係を検討する。結論として、両極に日本および中国の古代国家を配し、中心部にオホーツク文化を置き、その中間に「蝦夷」と「靺鞨」とをそれぞれ位置づける「集団的位置関係」がオホーツク文化の特色を規定したと論じる。第 4 章ではサハリン南西部のオホーツク文化の人たちが道北部へ南下して領域を拡張するプロセスを、季節的なキャンプ地経営から通年居住を可能にする「仮設竪穴住居」への展開として具体的に論じる。第 5 章ではオホーツク文化と中国側の古代国家との間での関係を、「帯飾金具」の分析を通じて検討する。帯飾金具は「アムール型」「チュルク型」「円型」に 3 分類されるが、北海道内で出土したアムール型は「栄浦型」と「モヨロ型」とに細分される。前者はアムール中流域から、後者は円型とともにアムール・松花江流域

から、中期前半頃にもたらされたことが示される。

第 2 部ではオホーツク文化と日本側の古代国家との間での関係を、擦文文化とアイヌ文化との検討を通して議論を展開する。第 1 章および第 2 章では、江別市兵村（後藤）遺跡と恵庭市茂漁遺跡の北海道式古墳を分析し、その被葬者が地域集団の中から析出された特定の人物群であるという当初の見解（第 1 章）から、未成年者を含むあらゆる年齢層から構成される家族墓的性格であるとする新たな見解（第 2 章）を展開し、それを「古墳」ではなく、「墳丘墓」として評価すべきであることを提示する。第 3 章では本州最北端の青森県域に分布する擦文土器の評価をめぐって、「青森の擦文集団＝安東氏の勢力基盤説」が成り立たないことを示して、その要因を北海道側の擦文集団が鉄器（鍛冶業）や塩、農作物を求めて交易のために訪れた結果であることを論じる。第 4 章では渡辺仁によって提起されたアイヌ文化の内容を規定する「クマ祭文化複合説」を批判的に検討しながら、オホーツク文化の段階から顕著になるヒグマの大量捕獲と子グマ飼育を伴う送り儀礼との要因が鉄器を入手するための代価であったという経済的な視点を導入する。

第 3 部ではオホーツク文化と擦文文化の鉄器および鉄器生産の実態が明らかにされる。オホーツク文化の鉄器生産の特徴は、その素材が大陸側からもたらされた鋼（あるいは鋼製品）と铸铁である点、铸铁には脱炭して可鍛鉄にする方法がとられていた点であることが示される。一方、擦文文化の鉄器生産の特徴は、その素材として鋼製品と铸铁とに加えて軟鋼が存在する点であり、オホーツク文化ではみられない軟鋼に铸铁を溶かして付ける方法がとられており、両文化における鍛冶技術の対照的な在り方が明確にされる（第 1 章）。また、オホーツク文化には穿孔した土器の破片を羽口として鍛冶に使用する独特な技術が存在し、それが本州系ではなくて大陸側と関連がある点が明らかにされる。

結では以上の分析・検討の結果を総合して、また M.Hudson 氏が天野氏のオホーツク文化研究の視点を World system 論の例として批判的に検討したことを受けて、序で提示した問題設定への回答が提示される。オホーツク文化は、極度に発達した海洋適用による経済的安定性を基盤とする交易によって周辺地域との関連をもちながらも、極東地域における古代国家中国と日本とを双極とする集団的位置関係にあるために、世界システムに直接的に組み込まれることなく、その最終段階まで自律性を維持できたことが結論として導き出される。

学位論文審査の要旨

主 査	教 授	小 杉	康
副 査	准教授	加 藤	博 文
副 査	准教授	吉 開	将 人
副 査	名誉教授	菊 池	俊 彦

学 位 論 文 題 名

古代の海洋民オホーツク人の世界

－アイヌ文化をさかのぼる－

平成 21 年 1 月 23 日文学研究科教授会の承認のもと、上記 3 名、小杉・加藤・吉開をもつて本論文の審査委員会を組織し、平成 21 年 7 月 17 日同研究科教授会の承認のもと、副査に上記 1 名、菊池を加え、計 5 回の審査と口頭試問を行った。

- 平成 21 年 2 月 6 日 第 1 回審査委員会

申請論文の複写を各審査委員に配布し、概要・体裁の確認、今後の審査日程の調整をおこなう。

- 平成 21 年 7 月 6 日 第 2 回審査委員会

論文内容を検討し、副査として菊池俊彦氏を追加することを決める。

- 平成 21 年 9 月 8 日 第 3 回審査委員会

副査として菊池を加え、論文内容の検討と問題点の整理を行い、口述試験の進め方を決める。

- 平成 21 年 10 月 13 日 口頭試問

- 平成 21 年 10 月 13 日 第 4 回審査委員会

口述試験の内容を検討し、問題点の整理と評価をおこない、学位授与を判定する。

- 平成 21 年 11 月 24 日 第 5 回審査委員会

審査結果報告書原案を主査が準備し、それを各委員が検討し、合議のうえ加筆訂正をおこない、最終案を作成する。

以下に、本論文の評価を述べる。

本論文は、天野氏の 30 年に及ぶオホーツク文化研究を総括して、文化の全体像を明らかにしたものである。今後の検討を必要とする点をいくつか残しながらも、1 つの考古文化の

全体像を多面的に論じ、またその特徴を明らかにした成果は高く評価される。また、その中で提示された個々の分析の結果や仮説、特に(1)礼文島香深井 1 遺跡の発掘調査の成果を基礎として提示された「オホーツク文化海獣狩猟文化論」批判、(2)古代国家を両極に置き、緩衝地域・集団を介在し、その中央部にオホーツク文化が位置したことが、特徴的な考古学的な状況を生み出したとする「双極構造」仮説、(3)ヒグマの大量捕獲や子グマ飼育を伴う送り儀礼の発達が生鉄・鋼製品の入手と関連するという経済的評価などは、今後の当該領域の研究において必ず言及され、あるいは検証されることによって、さらなる議論と検討を促進するものである。

ただし、本論文では考古文化を特定の民族ないしはエスニックグループと直截に対応させ、またそれに関連する今後の検討課題に対して DNA 分析の成果に全面的に期待するという記述や認識が目立ったが、これらの点についてはさらなる慎重な検討と議論が必要である。

本委員会は、当該申請論文を慎重に審査し、また口頭試問を実施して論旨を質すなど、十分にかつ慎重に審議を重ねた。以上の結果、全員一致して、同氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。